
デジモンアドベンチャー

レイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンアドベンチャー

【Nコード】

N9983J

【作者名】

レイル

【あらすじ】

8人の少年達の長い夏休みの序章となった

劇場版デジモンアドベンチャーを小説にしてみました

パソコンの画面から出てきたタマゴから始まる二人と一匹の物語

（前書き）

劇場版デジモンアドベンチャーを個人的に小説化した物です
表現が拙い部分があるでしょうが、ご容赦ください

なお、太一の独自部分での一人称をアニメ本編にあわせて僕から俺に変更しています

それは、数年前の事だった

俺が初めて、デジタルモンスターに出会ったのは

「ん．．．う．．．うう．．．」

トイレ．．．トイレ．．．ああ夜中なのに目が覚めちゃった

夜中、太一は二段ベツトの上で寝てたのだがトイレに行きたくなつたので起床してトイレにいつてきたのだが

戻ってくると自分と妹の隣の部屋のドアが開いていて、そこから光が漏れていた

「父さん？．．．ヒカリ．．．何やってんだよ？」

父かと思ってドアを開けてみれば、そこには部屋に置いてあるパソコンと向き合う形で妹のヒカリが立っていた

「．．．たまご」

パソコンの画面には赤くてよくわからない文字が左右に流れたり消えたり現れたりしている

「たまご？」

するとパソコンの画面が盛り上がって、そこから出てきたのは

「ああ・・・」

大きくて、図鑑で見たダチョウの卵よりも大きな卵だった

気がつくとき窓から日の光が差し込んでいて、母さんが呼ぶ声が聞こえた

「太一、じゃ母さん出かけるから、ヒカリの事お願いね」

「うはあい・・・なんか変な夢見たなあ・・・あ」

寝ぼけ眼で返事をしながら二段ベットの梯子を降りていくと

下のベットでは妹のヒカリが大きな卵を抱えて眠っているのが見えた

「じゃ行つて来ます」

「か、母さん！母さん！ヒカリが・・・・・・ああ・・・」

言い終わる前に母さんはドアを閉めてパートに行ってしまった

これ、どうしようか

見たことも無い、しかもパソコンから出てきた卵とそれを抱く妹を

見ながら

そんなどうすればいいかわからない状態の中一人頂垂れる太一であ
った

卵焼きを焼きながらリビングに目を向けると

いつだか父さんからもらったお土産のホイッスルを咥えて幼児用の
イスに座り

例の大きな卵を抱きかかえたヒカリがいる

「それ置いてこいよ、邪魔だろう?」

「ピュ〜ウ」

声でなく音で返事が返ってくる、置いてくるのが嫌だと言わんばかりに不機嫌さが籠った音だったが

「どうすんだよそれ、パソコンの中から出てきたなんで誰も信じないだろうし」

「ピュ〜ウ」

今度は不満げな音で返される

「でもさ、その卵ならでっかい目玉焼きができるな」

「ピューウ！」

怒られた、というか音だけで判別できるのはいかなものか・・・

「嘘だよごめん、じゃ食べな」

「ピッ」

焼きあがった目玉焼きをテーブルの上に置き、次は自分のを焼くべくキッチンに戻る

ヒカリは卵を抱えていた手を離してマグカップに入った牛乳を飲むとするが

ゴトン、と何かが落ちた音が聞こえた

慌てて自分が抱きかかえていた卵を確認するが、抱えていたハズの卵がない

そのままテーブルの下を覗いて

「ニヤーン」

我が家の飼い猫ミコがいた

テーブルの下を見回すも卵はどこにもない、顔を上げて唸っていると背後からゴトン、と音が聞こえた

「ピッ！」

そこか！と言わんばかりに振り返ると案の定そこには卵が転がっていた

イスを降りて卵を再び抱えようと手を伸ばすと

「・・・？」

卵が勝手に動いてヒカリの手から遠ざかろうと動き始め、それを追うヒカリ

そのまま卵はテーブルの下に隠れたりして部屋を一回りしたところで

「うわ！なんだ！」

調理のためにキッチンへ行って行ったイスを元の位置に直そうと運んでいるタイチと接触しそうになる

ひとりで動く卵を驚いた表情で見るとその後をヒカリが追いかけていく

何なんだ一体！？

太一は慌ててイスを元の位置に戻すとヒカリが入っていった部屋に入る

「なんだなんだなんだ！」

子供部屋に入るとピンと立った状態の卵とそれを見つめるヒカリ、すると

卵にヒビが入り上下に割れると、その中から金色の、小判みたいな形をした目が見えた

「な、なんだこれ!？」

そのまま見詰め合う二人と一匹

すると上下に割れた卵から黒くて丸い生物が飛び出してきた

そしてそのままべちつと太一の顔に張り付く、体は全体を黒い毛で覆っていてどこかくすぐつたい

「うわぁ!」

慌ててひつついた黒い生き物をひっぺがそうと引っ張り・・・はがれた

そのまま黒い生き物は起用に丸い体を動かしながら部屋をかけずり回ると、二段ベツトの下に逃げ込む

「はぁはぁ、はんだよこいつ・・・」

ベツトの下に顔だけつつこんでヒカリと二人でその生き物を見る

丸い体に黒くて短い毛が生えてて、ツノのような、耳にもみえる部分がある大きな金色の目の生き物だった

意外とかわいいな・・・じゃなくて!

その黒い生き物は見えない口を閉じたまま威嚇するように唸っていた

「よし、大人しくしてろよ・・・えいっ!」

そう言つて太一は頭にかけてあつたゴーグルをその黒い生き物のすぐ脇に投げつける

「ピピピピッ!」

驚いたのか変な声を出すと同時に、口だと思つ場所辺りから何かを吹き付けてきた

「うわっ!っだ、何だ!」

思わず頭をひっこぬいてそのまま後ろに転がつて声を上げる太一

しかし落ち着いて見てみると目の前を丸い半透明な物がフワフワ漂つていた

シャボン・・・玉?

驚いて後ろに転がつてしまった太一と反して、ヒカリは珍しい物でも見たかのように

というより実際珍しいのだが

そのシャボン玉を飛ばした生き物を眺めていた

見詰め合うこと2秒程

「ピッ！」

ヒカリが口に咥えていたポイツスルを短く鳴らす

すると今度は黒い生き物が先ほどのシャボン玉を吹いてきた

「ピッ！ピッ！」

今度は2回鳴らすと2回シャボン玉を吹いてきた

どこかツボにきたのか楽しそうに笑うヒカリ

「ヒカリ・・・」

そしてそれからしばらく続くポイツスルとシャボン玉の吹く音が響く部屋の中

太一はその光景を見続けた

シャボン玉は割れることなく、部屋の開いている窓からお台場の四月の空に舞っていった

「だいたいコイツ何なんだ？イヌか？ネコかな・・・卵から出てきたから鳥かなあ」

そう呟きながらその生き物を見る

今はヒカリがチョコレートをエサ代わりに食べさせていた、心なしか一回りほど大きくなったように見える気がしない太一

「しっかしよく食うなコイツ、もうねえぞピヨ助」

「ピュウ」

「ピヨ助じゃない？」

「ピッ！」

「じゃボタボタ」

「ピウ」

「じゃゴマクロ」

「ピウピウ」

「じゃブラックデビル」

まだ幼いゆえに横文字の知識がないのか、頭にハテナを浮かべて啜っていたホイッスルを放してしまうヒカリ

「母さんが帰ってきたらなんて言うんだよ・・・」

と言ったら電話が鳴った

「はい、やがみです」

電話に出たはいいものの、雑音しか聞こえないまま切れてしまった

「あれ？」

今度は電話機のボタンが点滅して変な音を出す、すぐに収まった

「ぴゅひよろひよろひよろ」

さっきの変な音を声に出しながら部屋に戻ると

「うわぁ！ヒカリ！・・・そ、そいつ・・・形が・・・変わった・・・」

ヒカリが抱き合っていた黒い生き物は、一回り大きくなりピンク色の長い耳のみたいな物を後ろに伸ばした生き物に代わっていた

啞然としていたがブツという嫌な音、ヒカリがその生き物を持ち上げると

「あ、ウンコした」

太一のやるせなさそうな声が部屋に流れた

「どう考えても・・・唯の生き物じゃねえな」

ウンコを処理し終わってそのままその生き物を眺めながら太一が呟いていると、ヒカリがリビングで食事を探っていたミークのエサを皿ごと持ってきた

猫用のエサの入った皿を置くと、その場で上下にびよんびよん跳ねていた生き物が皿にすりよってくる

「そんなもん食うかよ」

太一がそういうとその生き物は大きな目をつるつるさせて

ヒカリの顔に飛びついた

「うわぁ！こいつ！ヒカリは食い物じゃねえっーの！」

慌ててヒカリからひきはがすと今度は太一の顔に飛びついてきた

「うわわわ！や、ややや、やめろ！う、くう・・・いい加減にしろお！」

叫んで思いっきり自分の顔からひっぺがす

ヒカリは不思議そうな顔のままひっつかれる前の状態でいた、どうやら反応がついていかないらしい

ヒカリを抱えて部屋の壁際まで移動している間に、その生き物は皿に盛ってあるエサを食べ始めていた

「やっぱり捨てるぞこんなもん！」

とか言っていると飼い猫のミーコがその生き物ににじり寄っていた

「ニャーン」

「ああ？」

ミーコの声と行動に思わず変な声をあげてしまう太一

ミーコの声に気がついた生き物がその大きな目をミーコに向けると

「シャアアア・・・」

エサを奪われてご立腹の猫さんがいた

「ニャーン」

その生き物に襲い掛かるミーコと、人間みたいにヒイヒイ声を出しながら逃げる生き物

二匹は部屋を動き回って小物入れ等を倒しながら逃亡と追撃をしていたが

遂に部屋の隅に追い詰められてしまう生き物

「ミーコやめろ！もうやめろって！」

再び飛び掛ろうとした所で太一が止めに入るが

「あ・・・」

ギリリとネコの爪が光った、ザシュ！とかいう擬音が聞こえてきそうな光景

「いつてえ！」

太一の手を逃れたミーコはそのままエサ泥棒を同じように爪を光らせ、擬音が聞こえそうなくらい鮮やかに襲い掛かった

それでミーコは満足したのか、エサの入っていた皿を引きずつてもといったリビングに引き返していった

「くう・・・ネコに負けるかおまえはあ・・・」

エサ泥棒はシュンという擬音が聞こえそうな程落ち込んで太一に答ええた

夕方になり、母さんが帰ってきた

「ケーキ買ってきたわよ、食べない？」

「うん、後で」

食べたいのは山々だがこの生き物を放っておけないと後に回す太一

「ケーキだって」

「何？ケーキって」

そんな事をヒカリと一匹は話していた

子供部屋に届く匂いから今日の夕飯を判別するべく鼻をかがす太一

「今日はカレーだな」

「コロモンも食べたいって」

「なんだって？」

「コロモン」

ヒカリとは違う声が返ってくる

「なんだコロモンって、そいつに名前つけたのか？」

「ううん」

「コロモンはボクの名前だよ」

またヒカリ以外の声が返ってくる

「は・・・」

太一はその事にはっとしてヒカリと一匹を見る

「ごめんね、ミーコの事」

「ううん、いいよ、でもとっても怖かった」

「ヒカリ・・・そいつ・・・」

「私はヒカリ、お兄ちゃんはタイチ」

「タイチとヒカリ」

「そう」

ヒカリが嬉しそうに返す

「そいつ・・・言葉が・・・」

「友達のしるしだよ」

「ともだち・・・」

コロモンはそう言うと、ヒカリの顔に張り付いた

「助けてくれてありがとう」

ヒカリから離れ、太一と向き合つてそう言って今度は太一の顔に張り付いてくる

そしてすぐ離れたコロモンと見つめあふ太一

「友達の・・・しるしい？」

気の抜けた声で返した太一を、夕方の紅い光が子供部屋の窓を通して淡く照らしていた

ブッ！

「あ、またウンコしてる」

「ん・・・うう・・・」

「ピッ！ピュー！」

その日の深夜、太一はヒカリのホイッスルの音で起こされた

「どうした！？」

飛び起きてみるとヒカリと一緒に寝てたコロモンが体長を崩したのか、声を震わせながら震えていた

「コロモン！どうしちゃったんだよ！答えてよコロモン！」

慌てて声をかける太一とコロモンを心配して見つめるヒカリ

すると半分布団をかぶったままのコロモンがふくれあがっていく

太一からは布団が邪魔になってその下でどうなっているのかわからないが

布団からはみ出して大きな3本のツメが太一には見えた

「コ・・・コロモン・・・」

そのまま大きくなりベットの上の部分を大きな音を立ててつきやぶった

そこで大きくなるのは止まり、布団が落ちてコロモンが姿を見せた

「形が・・・変わって・・・る」

そこにいたのは黄色で緑色の目をした、太一の身長の3倍近くはありそうな大きな恐竜みたいな姿をしたコロモンだった

「タイチー！ヒカリー！」

「っは！」

その声にはっとして太一はドアを振り返る

父さんが帰ってきたのだ

「ヒツカリ、ターイチ」

「ヒカリ！タイチ！」

エレベータのドアが開くとヒカリとタイチの名をスピーカーが発する酔っ払っているおかげかそのまま気にせず掛け声で返し、我が家のドアを開け

「ただあいまあゝ！」

と大声で帰宅する

「静かに入ってきてよ、もう何時だと思ってるの？お酒臭いわねえ」

八神母が旦那をしかりつけてくる、酔っ払っているから効果は薄いが

「タイチー！ヒカリー！」

「やめてよ起きちゃうでしょ」

「おやすみのキスだよキス」

そう言つて八神父は子供部屋のドアを開けようとする、が開かない

「あ、あれ？開かないぞ？」

「おいタイチー」

「あなたやめてつたら！いい加減にして！」

「ご近所のこと考えてよ、あなたっていつつもそう」

ドア越しに聞こえる父さんと母さんの会話を聞きながら太一は必死にドアノブを抑えていた

コロモンがこちらを振り向くが声を出すわけにもいかず首を横にふる事しかできない

その意味を理解したのか興味がなくなったのか、恐らく後者だろうが

コロモンはそのまま視線を窓ガラスに向けて歩き始める

「ご近所のこと考えてよ、あなたっていつもそう」

その声が聞こえると同時にドアノブが開こうとしなくなり、ほっと息をつく太一だったが

ヒカリが窓を開けてコロモンを外へ出そうとしていた

「ヒカリ、バカ！やめろ！」

思わず声を出してしまう太一

コロモンのサイズに対して窓は小さすぎたのか窓枠を破壊して外へ出るコロモン

「太一？どうしたの、ヒカリ？」

太一の声と窓枠を壊した音を聞いた母さんが声をかけてくる

「お外・・・」

ヒカリはコロモンの背にしがみついてそう呟いた

「ヒカリ！」

太一は母親の声が既に聞こえていないのか声をあげる

「うわぁ！」

コロモンが外へと大きくジャンプして、ヒカリの驚いた声が聞こえた

「ヒカリー！」

慌てて窓の下を覗くと、コロモンがヒカ리를背中に乗せたまま下の駐車場に落下していくのが見えた

コロモンは駐車場に止めてあった一台の車を押しつぶすように着地するとそのままどこかにむけて歩き出してしまう

太一は慌てて玄関へ向かい靴を履くと、母親の制止の声を聞かずに外へと走り出していった

「ヒカリー！」

背中から太一が自分と呼ぶ声が聞こえていたヒカリだったが、高いところから落下する勢いに飲まれてなにもできないでいた

コロモンはヒカ리를背に乗せたまま一台の車を踏み潰して着地する

「びっくりした」

ヒカリの声が聞こえていないのか、コロモンはそのまま夜道をどこかに向かって歩き出す

背中にしがみついているだけのヒカリにはどうすればいいのかわから

ず、そのままコロモンに運ばれて夜道へと向かって行った

何かを探すようにあちこちを歩き回るコロモンと背中にしがみついているヒカリ

二人は道路の真ん中で行き来するタクシーや乗用車を眺めていたがクラクションが響くのと同時にコロモンの横顔を強い光が照らしたコロモンはとつさに上へ大きくジャンプして避け、トラックはそのまま走り去っていこうとした

「う・・・コロモン？」

コロモンの背中の上、ヒカリには何がおきたか分からなかった、どうしたのかと思ひ声をかけたが

次の瞬間コロモンはそのトラックに向かって大きな火の弾を吐いた幸いトラックには当たらなかったが、脇にあった電話ボックスにいたり、電話ボックスは炎上した

「あ・・・ああ・・・」

コロモンの突然の攻撃にヒカリは前途するしかなかった

そのまま何かを探すように動くコロモンの視界に交差点を曲がろうとするバスが写った

そのバスをコロモンは攻撃しようと口を開ける

それに気がついたヒカリが

「やめてコロモン、もうやめて！ねえったら！コロモン！」

そう言ってコロモンの頭に乗って静止の声をかける

コロモンはヒカリの静止の声が聞こえていないのかバスにむかって火の弾を吐き出そうとして

何かに気がついて視線を上に向けた

「うわっ！」

コロモンから落ちそうになったヒカリが思わず声を上げる

コロモンが視界の中心に納めてるのは二機の空を飛ぶヘリコプターだった

そのままそのヘリに向かって火の弾を吐き出す、しかしヘリには当たらずコロモンの放った火の弾は放物線を描いて夜の空に消えていった

コロモンは必死にしがみつくとヒカリを乗せてヘリを追って走り始めた

「ヒカリー！」

太一はヒカリとコロモンを探して夜道を走り回っていた

「どこまでいったんだよ・・・」

子供故、体力がおいつかない走りをしていたため、すぐに息があがつてしまう

何度も休憩をはさみながら走り回っていると、夜空を切り裂いて飛んでいく火の塊が見えた

もしかして・・・コロモンか？

そう考えて火の塊を放っただろう場所にむかって太一は再び走り始めた

夜空を進むヘリを追いかけていたコロモンだったが、しばらくするとヘリの音と光は夜空に消えてしまう

消えていくヘリの発する光を見ていたコロモンだったが、ふいに辺りに目を配り始める

見回すと公衆電話、デジタル時計や電光掲示板が無秩序に点滅し始める

コロモンはその視線を次に・・・自分達の上空へと向けた

町中の子供達は何かに呼ばれるように眠りから覚め、窓の外へと視

線を向けていた

中にはベランダに出ている子供達もいた、太一もまた彼ら彼女らと同様に

空に視線を向けていた

「な・・・何だあれ？」

そこには大きな、小さな島くらいはありそうな程大きい、大きなタマゴが浮いていた

「ああ・・・」

太一の口から感嘆とも言えるような声が出る

直後空に浮かぶタマゴがパツクリと二つに割れ、中から何かが降りてきた

コロモンとヒカリも同様にその光景を見ていた

「コロモン？」

ヒカリは何かの不安を感じたのか、コロモンに声をかける

しかしコロモンは聞こえているのかいないのか、直後走り出した

空に浮かぶタマゴの中から生まれ、降りてくる何かに向かって

走り出したコロモンは町の中心を通る大きな国道に出ると、飛んでくる何かに視線を投げた

飛んできたのは大きな、怪獣映画にでも出てきそうな大きい、緑色の鳥だった

その鳥がコロモンの頭上を通ると鳥の作った突風に煽られ、ヒカリがコロモンの背から落ちてしまう

コロモンは頭上を通り過ぎた鳥を振り返り、火の弾で三度の攻撃を放つ

鳥の飛んでいった軌跡をなぞるように火の弾は通ってゆき、内2発の攻撃がマンシヨンの一部にぶつかってはじけた

その大きな鳥は引き返してコロモンと対峙する様にコロモンの立つ国道に降りる

鳥が降り立つ光景を、到着した太一も見ていた

その鳥が着地しようとする火の弾が鳥のそばをかすめて奥にある歩道橋に当たる

その火の弾を見た太一が飛んできたほうを見ると

コロモンと、その足にしがみつくヒカリが見えた

「コロモン・・・ヒカリー！」

太一がコロモンの元に駆けつけるまでもに、コロモンは鳥に向かって攻撃をする

攻撃は鳥に当たるが、目だった外傷のないまま、鳥はコロモンを見定めるように見つめる

「ヒカリ！逃げるぞ！」

「嫌あ！コロモン！」

太一はヒカリを連れて離れようとするが、ヒカリはコロモンから離れようとしな

「早く、ほら！」

太一達のやりとりを意識していないコロモンは、再び攻撃を繰り返す

「あちっ！」

至近距離で放たれた火の弾の煽りをくらった太一が、火の粉の暑さに思わず声が出る

その攻撃は鳥を直撃するが、ダメージを与えられていない

刹那、鳥の鶏冠の部分が電気を帯だ様に発光し、雷のような物がその鳥からコロモンへ向かって放たれた

直感で感じ取ったのか太一は直前に鳥へと視線を向け、本能的にヒカリの上に覆いかぶさった

鳥の放った攻撃はコロモンの頭上、歩道橋を直撃し、その攻撃は歩道橋を砕いた

コロモンと太一達の頭上に多くの瓦礫が降り注ぐ

太一の耳に聞こえるのは自分の叫び声と頭上から聞こえるコロモンのうめき声

しかしすぐに瓦礫が降り注ぐ轟音にかき消される

その場はコンクリートと土の作った砂塵が立ち込めた

その中で太一はヒカ리를抱いて硬く目を閉じていた

しかし轟音が止んでも地面を伝わってくる衝撃しか感じられない

自分達を襲うであろうハズの瓦礫の与える衝撃が自分達にはこなかった

その事に気がついた太一はまぶたを開けると

そこには自分達を庇うように覆いかぶさっている大きなオレンジ色の恐竜がいた

コロモン・・・

偶然か、それともコロモンがそうしたのか、太一とヒカリはまた姿が変わり、大きくなったコロモンに守られた

「ヒカリ」

「コロモン・・・」

視線をヒカリに戻すと泣きそうな声でコロモンを呼んでいた

コロモンは紅くなった瞳で太一とヒカリを見据えていた

「コロモン・・・友達のにしるし・・・」

太一はふいに頭に浮かんだ言葉を呟いた

コロモンはそれに答えるように喉を鳴らし、その視線を正面の大きな鳥へを向け

空に向かって大きく咆哮した

上を向いた体勢から体を前後に伸ばし、顔を正面へと向け同時に、口から大きな火の塊を吐いた

その攻撃は鳥の片方の羽の根元に突き刺さり、その羽をもぎ取った片翼をもぎとられた鳥はその場でのたうちまわる、硬質な羽が中に舞い、地面に当たった羽はアスファルトの地面を抉った

コロモンは体を前後に伸ばしたいわゆる前傾姿勢のまま鳥に向かって突進

起き上がった大きな鳥と組み合った

「コロモン！コロモン！」

「す、すげえ」

隣でヒカリがコロモンの名を呼び泣いていたが、太一は目の前の光景に圧倒されていた

コロモンと大きな鳥は組み合った瞬間こそ拮抗してたが、コロモンが押し返され始める

片方の腕を振りほどいた鳥はコロモンの首をわし掴みにする

コロモンが苦悶のうめき声をあげると鳥は首を掴んだ手を振ってコロモンに背をつかせる

そのまま上から覆いかぶさろうとするがコロモンは腕を出してその手を掴み、体を起こす

もう片方の腕をつかもうとした鳥の腕を避け、その手を仕返しと言わんばかりに鳥の下顎をつかむ

コロモンはそのままその手に力を込め、鳥の下顎を砕いた

鳥は一声鳴くと開いている片方の手を握り締め、コロモンの胴に真横から強く打ち込んだ

その衝撃に耐え切れず後ろに倒れるコロモン

起き上がろうとしたがしかし

次の瞬間鳥の鶏冠が発光し、雷のような攻撃がコロモンに直撃した
中途半端に体を起き上がらせていたためか、コロモンの体は爆発と
共に大きく後ろへ飛ばされる

太一はヒカ리를抱え、がむしゃらに横合いへ飛んだ

コロモンが地面に激突した際に飛んできたアスファルトの破片が倒
れこんだ二人の足元に散らばる

すぐさま体を起こしたヒカリがコロモンに近寄ろうとする

「コロモン！コロモン！」

「ヒカリ！やめろ！」

「コロモンが、コロモンが！」

必死に押しとどめ、コロモンを見やる太一

太一の目線のその先で、コロモンの瞼は閉じたままだった

「コロモン・・・あ」

視界の端に鳥が近寄ってきているのが写った

そちらを見ると、鳥は慢心相違と言っていい状態で、ふらつく足を
前に進ませながら、コロモンへと近づきつつあった

「コロモン！起きて！コロモン！」

太一の見ている目の前で、その鳥の鶏冠が電気を帯びたように光っていくというのに、コロモンは目を覚まさない

「う・・・くう・・・ふ・・・うう・・・」

もうダメなのかと太一の心がそう思った途端、目頭が熱くなり視界がぼやけてくる

「ピュー・・・フウ・・・」

しかしその考えを笛の音がかき消した

その音は頼りなさそうに聞こえたが、その音を聞いたとき確かに太一の心に何かを与えた

「は・・・」

太一脳の中でヒカリが首に下げたホイッスルを吹こうとしていた泣きながらなせいか呼吸が整っていないせいか届く音はひどく頼りない

「ヒカリ・・・」

太一は驚きの表情でヒカリを見る

ヒカリはまだ諦めていなかった、そう思った途端、太一の体は勝手に動いていた

ヒカリの手からホイッスルを取ると、肺いっぱい空気を読み、
力いっぱいホイッスルを響かせた

「ピイイイイイーーーーー」
「ーーーーッ！！！」

その音はこの光景を遠くマンションのベランダや窓から見ていた子供達にも届いた

「え？」

マンションの窓から鳥を眺めていた少女に

「あれ見て！」

窓から乗り出して2匹の戦闘を見ていた兄弟に

「あの子・・・」

太一の知り合いだろうか、笛を吹いた人物を見て驚いてる少女
木霊した笛の音は夜空を駆けて広がった

「っはあ！はあはあ・・・」

肺にある空気を全て使い果たした太一は体を起こして大きく息をつきながらコロモンを視界に納める

そして、コロモンの瞼がふいに開いた

最後の攻撃をしようと近づいていた鳥は目を開けたコロモンに怯んだ
コロモンは周囲のアスファルトの破片を起き上がりながら吹き飛ばし、

再び夜空に向かって咆哮した

太一はそのコロモンから何かを感じ取ったのか

「撃て・・・！」

そう言った直後、コロモンは太一の言葉に呼応する様に今までとは比べ物にならない火の塊を放った

その攻撃が鳥に当たった途端、太一の視界を強烈な光が襲った

とっさに閉じた瞼のなか、耳に届くのはコロモンが放った火の塊の破壊音とあの鳥の叫び声

そしてコロモンの咆哮だった

光が収まり、太一がゆっくりと目を開くと、そこにはあの2匹の戦った後が残り

コロモンもあの大きな鳥も、どこにもいなかった

いつのまにか朝日が昇り始め、東の空が明るくなっていた

太一はただ呆然と、その朝日の光を眺めていた

耳に聞こえるのはヒカリがコロモンを探す声

ただなんとなく太一には彼らは帰っていったんだと、どこかでそんな気がしていた

あれは、早すぎる出会いだった

俺達の世界では出会ってはいけないモンスターだった

だから今、ぼくはここにいる

（後書き）

たった20分の映像作品を小説にするのに5時間もかかってしまいました

改めて小説を書くというのが大変な作業だなと実感しました

久々の小説執筆だったのでそのうち加筆修正するかもしれません
ここまで読んで頂きありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9983j/>

デジモンアドベンチャー

2010年10月10日07時54分発行